

---

# BLEACH 創造と破壊の斬魄刀

斬月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

BLEACH 創造と破壊の斬魄刀

### 【Nコード】

N0292N

### 【作者名】

斬月

### 【あらすじ】

この小説は黒崎家にオリジナルキャラを投入させてみた作品です。この作品はふとした思い付きから生まれました。大変、駄文ですが頑張っていきたいと思います。

## 第一話（前書き）

この小説を読んでくれてありがとうございます

このBLEACHノキャラの名前は漢字変換しにくいので略すことが多々あります

ではどうぞ

## 第一話

俺の名は黒崎一護 オレンジ髪に茶色の瞳。特技幽霊が見える 職業高校生兼死神代行だ

遊子

「一護おにーちゃんみんな呼んできてご飯だよ」

一護

「おう、わかった」

こいつは、黒崎遊子俺の妹で小学5年生。夏梨の双子の姉でショートヘア。夏梨とは正反対に気が小さく、おしとやかで泣き虫。家族の中で唯一の母親似で、幼くして黒崎家の母的存在。家事は全て彼女が行っている

コンコン

とドアをノックする

一護

「夏梨飯だぞ」

夏梨

「わかった」

こいつは黒崎夏梨 遊子の双子の妹。気が強く男勝りな性格で、ほとんど泣いたりすることは無く、弱音を吐こうともしない。そのボーイッシュな性格故か男子には人気があり、一緒に遊ぶことも多い。

一護同様霊感が強く、死神・虚もはっきり見えている)

その声を確認すると一護は隣の部屋に入った

一護

「水兄ー遊子が飯だつてよ」

水花

「ああ、わかった。これが終わったらすぐに行くよ」

一護

「あいよ」

こいつは俺の2つ年上の兄貴「黒崎 水花」(くろさき すいか)

だ髪の色は黒にオレンジが混ざった感じで髪型は俺とほとんど同じ  
瞳の色はブラウンである背は俺よりも6センチほど高いしかもイケ  
メンに入る顔つきである

性格は物静かで冷静しかも俺たち兄弟や周りの人にもやさしいでも  
妹たちを泣かせたり悲しませたりする奴には鬼のように怒る。(俺  
や親父にも)

喧嘩はあまりしないが少なくとも俺やチャドよりは強い

そして何でもできる才能もある、それにその才能を鼻にかけるでも  
なく俺たちにコツを教えてくれたり手伝ってくれる自慢の兄貴だ。  
靈感はないらしい

そして食卓、

黒崎家一同

『いただきます』

今日のおかずはハンバーグだ

父

「で、水花、今度の大学受験の調子はどうだ？」

水

「まあまあだね」

夏

「水兄ーなら楽勝だって」

遊

「そうだよ水花おにいちちゃん賢いもんね」

一

「医大だっけか？」

水

「ああ・・・安心しろよ俺は大学病院に行くつもりだからお前の夢の邪魔はしないよ」

父

「なんだ一護、お前やっぱりうちの病院継ぎたかったのか？」

一

「ちげーよ、もう、兄貴のせいで変な誤解招いたじゃねーか！」

水

「すまんすまん、つい口がすつべてな」

夏と遊

「ハハハハハハハ」

と愉快的な食卓が終わった

そして俺は自分の部屋で寝転がっていたそのとき代行証が反応した  
そのとき押入れから朽木ルキアが出てきた

ルキア

「一護、虚だそれともかなりの数だぞ」

一

「ああ今行く」

すると一護は代行証で死神化した死覇装しはくしょうと呼ばれる黒い着物を纏背  
中に斬魄刀ざんぱくとう斬月を携え窓から外に出た

そして、一護とルキアは反応のあった場所に向かったそのとき見た  
光景は

ルキア

「じ、地獄門から虚があふれ出ているだど！！！！」

地獄門

生前に悪事を働いた者は、死神によって虚としての罪を濯がれた後、

開かれた空間に現れた刃に貫かれ引きずり込む門

一護

「ルキア？地獄門から虚が出てくることがあるのか？」

ルキア

「いやそんなはずはない」

ぐうおおおおおおお

虚5匹が一護に襲いかかった

一護はすぐさま斬月をかまえ

げつがてんしょう  
月牙天衝

「自らの霊力を刀に喰わせて、刃先から超高密度の霊圧を放出し斬撃を巨大化させて飛ばす斬月の能力であり唯一の技。」を放った

襲い掛かろうとする虚は消し飛んだ

ルキア

「舞え『袖白雪』」

ルキア

「次の舞・白漣つぎのまい・はくれん」

刀で地面を四ヶ所突き、そこから強大な凍気を一斉に雪崩のように放出して、敵を凍らせた。

しかし、次から次に出てくる虚は勢いを増していた



一護

「ルキアあの地獄門を凍らせられないか？」

ルキア

「無理だ一護あれは凍らせられない」

一護

「月牙天衝」

再び一護は虚を一掃した

そして、地獄門へ目掛けて

一護

「月牙天衝」

を放った

次々に出てくる虚を消し去りながら月牙天衝は地獄門の中へ入っていった

しかし、虚はまだまだ出てきた

ルキア

「これではキリがない」

そのとき

???

「終わりはすべての始まり始まりはすべての終わり全てを壊せ全てを創れ〔斬魄〕」

ルキアと一護は声の方向を向いた

そこには斬魄刀を携え顔を布で隠し死覇装を着た死神らしき姿があった

???

『万象一切灰燼と為せ『流刃若火』』

と再び解号をとなえと刀はなんと 流刃若火に変化した

ルキア

「あれは総隊長の斬魄刀ではないか!!?」

?熱系最強にして最古の斬魄刀。斬魄刀解放と共に斬魄刀全体から巨大な炎を発し、全斬魄刀中最高と言われるほどの高い攻撃力を発揮する。始解状態で周りが炎に包まれる。

近くにいた虚は炎に焼かれていった

そして、なぞの死神は刀を振り

???

なでぎり  
「撫斬」

流刃若火、一つ目の技。炎を刀にまわせ相手を一刀両断する。

というと近くにいた虚を真っ二つにし燃やし尽くした

さらになぞの死神は地獄門めがけて

「城郭炎上」  
じょうかくえんじょう

炎の壁を発生させ、対象を囲み戦闘に介入できないようにできる技を発動させた

その瞬間、虚たちは門から出れなくなってしまった

するとなぞ死神は

死神

「穿て『巖霊丸』」

再び解号を唱えると 鐔が変形し刀身がレイピア状になった

ルキア

「あれは雀部副隊長の斬魄刀だ!!」

なぞの死神

「封鎖呪縛」

すると地獄門が閉じ始めた。

ルキア

「雀部副隊長の斬魄刀には地獄門を閉じる力があるのか?」

すると納得したようになぞの死神は立ち去ろうとしたそのとき

ルキア

「さて、貴様いったいどこの隊の者だ!!」

しかしそんなのお構い無しで立ち去ろうとする死神

そのとき

ルキア

「縛道の六十一 六杖光牢」

ルキアはなぞの死神を捕縛しようとしたしかし軽くよけられさらには

なぞの死神

「舞え『袖白雪』」

ルキア

「なに!!!!!!!!!!!!!!」

死神は袖白雪でルキアに攻撃をした

なぞの死神

「初の舞・月白」  
そめのまい・つきしろ

刀で円を描いた場所の天地全てを凍らせる。

ルキア

「うわーーーーー」

ルキアは見事に凍りずけになった

一護

「ルキアてめー」

一護はなぞの死神に斬り掛かった

しかし簡単に攻撃を受けられ死神の蹴りがみぞおちに入る

一護

「がはっ・・・テメー」

イチゴは右手に斬月を持ち腕をまっすぐ前に突き出し左手で構えそして黒い霊圧をほとばしらせた

一護

「卍・・・解」

『天鎖斬月』（てんさざんげつ）

全てが漆黒の日本刀で、普通の日本刀より少し長い。卍型の鍔、柄頭に途切れた鎖がついている。

一護本人は具象体斬月の黒いロングコートに似た独特の死覇装を纏う。卍解状態になると一護本人の霊圧は赤黒い色に変化する。また死覇装の変化までも【卍解】の内に入るため、霊圧の増減を視認しやすい様相となっている

通常の死神の卍解に比べ圧倒的に小型であり、解放された強大な霊力の全てをその小型に凝縮することで卍解としての強力な攻撃力を保ったまま超スピードの斬撃と移動を可能にする。

一護

「うおおおおお」

一護は超スピードで死神に斬りかかった

さすがの死神も一護のスピードにおどろいて隙ができた

一

「今だ、月牙天衝」

一護は調子近距離で月牙天衝を放ったしかし驚いたのは一護であった

なんと相手の斬魄刀に月牙が吸収されていくそして死神はその霊圧をそのまま一護に月牙の要領で放った

????

「零斬天衝」  
れいざんでんしょう

この技は一護の月牙天衝にそっくりだがどうやら仕組みが違う自らの霊力を刀に喰わせて、刃先から超高密度の霊圧を放出し斬撃を巨大化させて飛ばす斬月と違い明らかに周りの霊圧を吸収して放ったのである

一護は斬月で何とか受け止めているが威力に押されていた

そして一護は「虚化」をした

死神でありながら虚の力を混在させることで爆発的に戦闘能力を向上させることができる。この状態の一護は仮面をつけるだけでなく、

眼球は黒、瞳は黄色に変わる、虚化時は斬撃及び月牙天衝が霊圧で軌跡を描く圧倒的なものに強化される

一

「ん？何だ、体が楽になった・・・まさかあの斬魄刀俺らからも霊圧を奪ってやがるのか？くそ月牙天衝！！」

一護は黒い月牙天衝を放った

なぞの死神はそれを瞬歩でよけた

一

（さっきは簡単に返したのに今度は返さなかったつまりは死神の霊圧だけを吸収できて虚の霊圧は吸収できねーのかよし）

再び一護は月牙を放ったしかし

なぞの死神

「波悉く我が盾となれ 雷悉く我が刃となれ『双魚理』」  
ふたたび刀が双魚理に変化した

刀身が逆十手型の二刀一対型になる。片方の刃で受けた力をもう片方の刃から放出する等して攻撃できる能力を有する。さらに、二つの刀の間にある五枚の札の力で、相手の技のスピード・軌道などを僅かに変えることで、相手の避けるタイミングをずらすことを可能にする

月牙は刀に吸収されもう片方の刀から放出された

一護

「避けられねー」

一護はその攻撃をモロに食らった

一

「ガハアこいつマジで強い、くそ、〔お遊びはこれ位にしてささと帰るぞ遊子や夏梨が心配するぞ〕!!!?」

すると死神は顔の布を取った

一護

「な、な・なんです、水花が死神なんだよ!!!?」

水花

「お前が人のことを言えた立場か?」

一護

「でもよー」

水花

「まあいい今日は家に帰るぞ話は明日してやる。あ、そうだ、あの子の氷は叩けばすぐに割れるから早く出してやれよ」

すると水花は消えた

一護

「どうなってるんだよ?」



一護はすぐにルキアを氷からだし浦原さんに預けて家に帰った幸い  
手加減されていたので怪我一つなかった

しかし、一護は解せなかったなぜ自分の兄が死神なのかそしてなぜ  
今まできずけなかったのかそしてなぜあらゆる斬魄刀の能力を使え  
たのか山積みであった

しかし一護は戦いの疲れが出たのか自分の部屋に入るとすぐに眠っ  
てしまった。



## 第一話（後書き）

感想お願いします

投稿はかなり遅れると思います

では、さようなら

## 第二話（前書き）

ほんとにこんな駄文読んでいただけて幸せものです

## 第二話

俺は目を覚ましたそしてやる事は決まっていた

そう、俺の兄貴に昨日の説明を聞かねばならなかった

コンコン

一

「兄貴入るぞ」

ガチャ

そこにはあきらかに待ってたぞと言わんばかりにこちらを向いていた兄貴がいた

一

「兄貴、昨日のことだが「先にドアを閉めろ」あ、ああ」

ガチャ

水

「お前の言いたいことは判っているなぜ俺が死神の力を持っていてなぜ自分が死神なのをしっていて知らんぷりをしていたかだろ」

一

「ああ、そうだ」

水

「答えてやるよ俺が死神の力に目覚めたのは物心ついたときからだ俺も特別に霊力が強かったんだろうな小さいころから霊や虚が見えていたそして虚に襲われることも少なくなかったそのとき発現したのが死神の力だ」

一

「そんなに前からなのか？」

水

「ああ、そうだ、そして俺は暇あるごとに虚を狩っていたもろんお前や遊子や夏梨を守るためになしかし俺は力を持ちながら母さんを守れなかったそのことを悔やんだ俺は自分の霊圧をお前たちの結界に使うことにしたんだ

その結界がうまくいってお前たちには幽霊は見えても虚は見えなくなつて虚も近づけなくした、しかし、あの日

死神が家に来たときその結界が無くなったんだそのせいで虚はすぐにお前たちに襲い掛かったそのときだろうお前が死神に目覚めたのはそして俺はお前を見守ることにした」

一

「そんなことがあるのかよ。じゃーなんで母さんの命日のとき夏梨たちを助けなかったんだ！！！あいつらがどれだけ危ねー思いしたのか判ってんのか？」

水

「お前があいつを倒さなければならぬからだお前は母さんを自分が殺したと思い込んでいたからな」

一

「だったらなぜ俺が死神に目覚めたとき兄貴が姿をあらわさなかった」

水

「死神どもに悟られないためだ俺とお前が死神だとばれたら死神どもに遊子や夏梨までもが死神に目を付けられ危険と判断されれば消されるんだぞお前がルキアと言う死神が連れ去られる時のようにな、だから俺は姿をあらわさなかった」

一

「で、でもよ死神だってさすがに遊子や夏梨に手を出すとは思えないぜ」

水

「それはどうかなお前はたまたま死神に受け入れられたただけだ遊子や夏梨もそうとは決まっていけない」

一

「それはわかったじゃーもうひとつだけあの斬魄刀はいいなんだ」

水

「あれは俺の斬魄刀そのなも斬魄だ」

一

「ずいぶん思いきった名前だな」

水

「ああ、あの刀はな始まりの斬魄刀と呼ばれている」

一

「始まりの斬魄刀?？」

水

「そう、そして、尸魂界を創り刀だこの刀の前の持ち主はこの刀を使い尸魂界を作り出したそこえ迷える魂が住める場所を作ったそして尸魂界に住んでいる者に斬魄刀を作り出す力を与えた」

一

「斬魄刀を作り出す力を与えた???」

水

「死神の斬魄刀は死神の魂と尸魂界の霊力を混ぜ合わせて生まれるそして俺の刀は尸魂界と常にリンクしているだから俺は死神のこともかなり詳しいさらに死神の斬魄刀の能力を使うことができ戦い方もその斬魄刀から教わることもできるついでに言うならばこの斬魄は抜け殻状態だ。だから周りの霊圧を吸収してしまう刀だ」

一

「そんな斬魄刀ありかよ」

水

「ありだ、説明することはこれくらいか」

遊子



「一兄、水兄ーごはんだよーー」

水

「だっそうだ、今行くーーー」

そして食卓

夏梨

「二人で何はなしてたの？」

水

「なーにこの病院は誰が継ぐかについてだよ」

父

「一護お前やっぱりこのb yぐべ」

強烈な蹴りが入った

一

「ちがうってんだろ」

夏

「ふーん」

遊

「お兄ちゃん食事中に暴れない」

水

「そうだぞ一護」

ガン

水花のげんこつが一護の頭にあたった

一

「いてっ」

水

「夏梨久しぶりにサッカーの練習付き合ってやるよ」

夏

「マジで！！またテクニク教えてよ」

水

「わかったわかったじゃ食べ終わったら行くか」

夏

「うん」

水

「そうだ、遊子今日のご飯なんだ帰りに材料買ってきてやるよ」

遊

「今日は唐揚げだよ」

水

「唐揚げか好物だな解った5時に帰るよ」

父

「お前は本当に遊子や夏梨に優しいな」

水

「父さんの子だからじゃないかな」

父

「遊子、夏梨父さんにもたまには甘えてくれー」  
すると父はいきなり飛びかかろうとした

ドスツメキメキグチュ

水花がとっさに父の腹に強烈な蹴りを放った

父

「水花よ父を殺すつもりか」

水

「大丈夫、急所は外した死にはしないというか今のはセクハラだろうが遊子が驚いて泣いてしまっただろうが「マジギレ」」

父

「おまえだって十分なシスコンだろう・・・・・・がやああやめてー・・・それいじょうーはーぶばーしぬー  
ー・・・」

一

「死んだか？兄貴に対してシスコンは発言は死刑だろうが・・・ハッ」

がちゃん

一護は手に持っていたコップを落とし殺気のある方向を向いた

一

「水兄ーごめん口が滑った・・あれrなにな・その構えは・・・  
がやあやめてー・・・それいじょうーはーぶばーし  
ぬー・・・・・」

水

「さ、夏梨いくか」

遊

（久しぶりに見たお兄ちゃんの阿修羅モード）

夏

（親父はともかく一兄ーは可哀想に）

遊&夏

「「また来世でね」」

そして、二つの死体を残して水花は夏梨とサッカーをしに川沿いの  
土手にきていた

ドン

水花がシュートの練習をしていたそれも明らかに素人ではないシュ  
ートを決めていた

夏

「すげーすげーよ水兄あのシュートの仕方教えてよ」

水

「あれは多分無理だと思うぞ。ほかのテクニック教えてやるから勘弁してくれ」

夏

「わかった」

そして、夏梨と水花は夕方近くまでサッカーをしていた

水

「さて帰るか」

夏

「うん・・・わかった」

水

「眠いのかだったらおぶってやるからほら」

夏

「うん、水兄ーのテクニックめっちゃむずかしーな・・・ZZZ」

水

（さて帰るか・・・はっお使い忘れていた）

水

「まーいいか、このまま帰りに商店街を通って帰ろう」

水花は商店街で本当に夏梨を背負いながら買い物をしていたそのときは周りから注目されていたのでかなり恥ずかしかったらしい

そして、帰路

水

「夏梨も大きくなったよな、母さんが死んでから少しの間は笑顔の作り方が判らなくなったりしていて精神的に苦してた時に比べたらよく甘えてきて笑うようになったな・・・（だから、俺は何があっても何を敵にまわしてもお前たちを守る絶対なんだ）」

そのとき

水

「！！虚か」

そこには少し変わったお面をつけた大虚がいた

虚

「ぐっうおおおおおおお」

水

「夏梨が起きちまうだろーが！！！」

すると水花は義魂丸を飲み込んだ

そして、死神の姿の水花が体から抜け出した

水

「セバスチャン、夏梨を守りながら家に帰ってろ」

水「セバスチャン」

「イエス、マイロード」

すると

セバスチャンはかりんをおぶりながら戦線から離脱した

死神になった水花は刀を抜き

水

「断ち切れ『雷火』」

斬魄刀…『雷火』らいか

能力解放と共に、先端が鉤爪のような形をした刀に変形。鉤爪の中央部に火の玉を形成し、刀身に火を纏わせることができる。また、柄の底面からも火を噴出することができ、飛び道具を跳ね返す際にブーストとして使用する事ができる。

斬魄刀が雷火に変化した

水花は鉤爪で虚の体を切り裂くと炎で燃やし尽くした

その間、わずか7秒であった

水

「こんなに堂々と虚を暴れさせているとはやはり死神は邪魔なだけ

だな」

そして水花は家に帰って自分の体に戻った



## 第二話（後書き）

いきなりの黒○事ねたです

これは水花が死神からくすねた義魂丸を自分で改造した品です

またお会いしましょう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0292n/>

---

BLEACH 創造と破壊の斬魄刀

2011年2月16日03時16分発行